

総 会 議 事 録 (抜 萃)

日 時 昭和32年5月25日 11.25~12.50
場 所 名古屋大学工学部2号館3階講堂
出席普通会員 137名
委任状総数 283名

5月7日調べで普通会員は1,419名(A会員1,068名, B会員351名)で, 定款第36条による最低出席者95名, 委任状189名の条件を満しているため総会は成立。次に議長は出席者の互選によるのであるが, 時間の節約上常任理事会の決議により吉武大会委員長を推すことを一同に計り, 満場一致同氏と決定した。

吉武素二氏が議長席につき, 総会が開始せられ, その内容は次の通りである。

(1) 挨拶 畠山理事長

(2) 学会賞贈呈 //

(内容別記参照)

(3) 昭和31年度事業経過報告 淵 理事

(4) 昭和31年度決算報告 高橋理事

異議なく承認された(別表参照)

(5) 本年度事業計画案審議 高橋理事

(6) 本年度予算案審議 //

(5)(6)は一括して原案説明があり, 支部設立未決定箇所を経費の計上に関し修正方の提案があったが, (8)イで東北, 北海道両支部の設立が承認せられ, 結局原案通り可決された(別表参照)

(7) 75周年記念事業計画審議 伊東理事

原案通り異議なく承認された。

(8) 提出議題審議 淵 理事

(イ) 東北, 北海道支部設立に関する件

山本東北地方理事および山岡北海道地方理事から夫々設立主旨の説明があり, 満場一致可決された。

(ロ) 定款の一部改正に関する件

定 款 一 部 改 正 案

1. 第2条中 中央气象台を気象庁とする。
2. 第6条中 ②の特別会員は団体会員と改め, 会費年額1,500円……を1口としてA会員は会費年額金1,500円, B会員は会費年額金3,000円を納める団体と改める。
3. 第6条中 ③の維持会費は賛助会費と改める。
4. 第36条中 通常会員の総数の15分の1以上……を通常会員25分の1以上と改める。

改 正 理 由

現在会員は約1,400名おり, 15分の1以上の条件は95名以上の出席を必要とする。このため, 総会を地方で行うときは, 総会が成立し

ないおそれが多い。また, 会員数の変動もあるので, 25分の1以上にしたい。なお, 委任状を含めた出席会員数は従来通り。

以上の中1, 2, 3項は異議なく可決された。4項については種々討論が行われたが, 結局明年の総会は東京で開かれるので, このままでも影響がないので, 来年の総会まで持ち越す提案がなされ, これに対し賛否を求めた結果この案に賛成は97名の過半数となり, 来年迄継続審議ということになった。

なお, 委任状に関し種々の角度から討論がなされ, 来年の総会には議事の内容を全会員に早期に提示して, その内容に対する委任事項を明瞭にすることとなった。

(イ) 学会賞受賞選定規定の一部改正に関する件
原案通り可決された。(アンダーラインの部分が改正箇所)

学 会 賞 授 賞 者 選 定 規 定

1. 日本気象学会賞受賞者を選定するため, 学会賞候補者推薦委員会(以下委員会と称す)を設ける。
2. 委員会は5名の審査委員をもって組織し, 委員は毎年9月理事長が会員の中よりこれを委嘱する。
3. 委員会は原則として会員の中から前5ヶ年間の気象集誌に発表された論文を審査して, その中から気象学に関し貴重な研究をなした者を選び(最高2件までとする), それに選定理由書をつけて2月末日までに理事長に報告する。
4. 理事長は常任理事会にかけ, 全理事にたいし無記名によってその可否を投票させる。全投票数は理事総数の4分の3以上でなければならない。有効投票のうち, 3分の2以上可とする得点があるものを受賞者と決定する。
5. 学会賞は賞状およびメダルならびに副賞(賞金)とし, 総会においてこれを贈呈する。
但し, メダルは1件1人または2人とし, 1件3人以上の場合は常任理事会でその都度決定する。また, 賞金は原則として1件1万円とする。

(ロ) 岡田賞(気象学会の部)受賞者選定規定の制定に関する件
原案通り可決された。

岡田賞（気象学会の部）受賞者選定規定

1. 岡田賞（気象学会の部）受賞者を選定するため岡田賞候補者推薦委員会（以下委員会と称する）を設ける。
2. 委員会は5名の審査委員をもって組織し、委員のうち4名は毎年5月理事長が会員の中よりこれを委嘱し、他の1名は岡田武松先生記念会理事長が委嘱したものとす。
3. 委員会は原則として気象学に関する調査、著述、教育並びに気象器械および計算図表の発明、改良等により、日本の気象学および気象技術の向上に寄与した者1件を選び、8月末までにその選定理由書をつけて理事長に報告する。

4. 理事長は常任理事会にかけ、全理事にただし無記名によってその可否を投票させる。全投票数は理事総数の4分の3以上でなければならない。有効投票のうち3分の2以上可とする得点があるものを受賞者と決定する。
5. 岡田賞は原則として賞状およびメダルならびに副賞（賞金）とし、秋の大会においてこれを贈呈する。但し、メダルは1件2人までとし、1件3人以上の場合は岡田武松先生記念会理事会においてその都度決定する。また賞金は原則として1件1万円とする。

（注）名誉会員に関する件 島山理事長
定款等の名誉会員に関する事項に不備の点があるので今回は一応取り下げることとなった。

昭和32年度日本気象学会賞受賞者

電波気象学に関する研究

平尾邦雄，田尾一彦（電波研究所）

平尾邦雄，田尾一彦両君は最近五ヶ年以上の間超短波電波の伝播に関する問題を理論，実験の両方面より追求して貴重な研究を行った。

平尾邦雄君の研究は主として、フェーディングの問題を追求したものである。同君は実験に適した電波並びに気象測器を作製し、観測結果を解析するため、相関係数計算器機も考案した。これらを用いて観測及び解析を行ったのであるが、その前に散乱及びシンチレーションによるフェーディングの理論式を作った。観測は波源より40 km 乃至 200km の範囲にある多くの点において行い、電界強度変化やフェーディング強度のスペクトル等を吟味した。フェーディングの強度は距離と共に増すことを確認し、スペクトルを電波の経路や気象条件などにより説明した。又気温、湿球温度、屈折率の乱れを観測してこれを解析し、強度の日変化も吟味した。更にフェーディングの起る機巧に就てモデルを提出して地形、気象条件との関係を一般的に論じた。

以上によってフェーディングのいろいろの特性を明らかにしている。

田尾一彦君は電界強度と気象との関係を調べたものである。まず対流圏内に於ける電波伝播を理論的に扱い廻折波、不連続面から来る反射波の強度、地球と不連続面がある場合の電界強度などを求めた。次に電界強度を観測し、更に屈折率を気象観測より求めて、両者を比較した。又電界強度の変化が大気の安定度に関係することも見出した。更に総観気象的条件と電界強度の変化の関係を吟味した。この研究により電界強度の変化を総観気象

的立場から予報することの可能性を示した。

以上両君の研究は最近急速に発達しつつある電波気象学に重要な貢献し、我国における電波気象学の分野を著しく進歩せしめたもので、高く評価されるべきものである。よって本会は両君に学会賞を贈ってその顕著な業績をたたえる次第である。

論文

平尾邦雄，

Fading of the ultra short wave and its relation to the meteorological conditions : Journal of the Research Laboratories 3, No. 13, 1956, 189-288
Special Instruments for observation and analysis of VHF fading H. Murayama と共著 Journal of the Radio Research Laboratories 2, No. 8, 1955, 207-216

田尾一彦

On the Propagation of ultra short waves beyond the horizons, Japanese Journal of Geophysics 1, No. 1, 1954, 1-79

On the relationship between the hourly variation of field strength and the structure of the lower atmosphere, Journal of the Radio Research Laboratories 2, No. 8, 1955, 181-191

Some considerations for the field strength of ultra short waves at night Journal of the Radio Research Laboratories 3, No. 11, 1956, 77-99

On the distribution of refractive index in the lower atmosphere in Japan, Journal of the Radio Research Laboratories 1, No. 5, 1954, 17-28
(Y. Baba と共著)

平尾, 田尾共著 電波気象学
電波研究所季報 第2号
超短波の伝播と気象 科学 24, No. 12, 1954, 590-594

広範囲高層天気図の解析的研究

須田 建 (気象庁), 朝倉 正 (気象研究所)

気象学の発達には理論的な正しい洞察が要求されるが、同時に周到な解析が基礎をなしていることは歴史の示すところである。しかし解析的な研究は地味であり、一見簡単ながらも非常に努力と技術を要する。このため、とかく研究者は敬遠しがちであった。須田, 朝倉の両君は北半球高層天気図の解析を行い、理論的な研究に比し、ややおこなれていると言われるこの方面の研究の水準をあげた。ことに1954年の梅雨の周到な解析により、梅雨の現象が決して局地的のものでなく、偏西風帯の波による世界的規模のものであることを明かにし、たとえばインドのモンスーンと梅雨とが関係があることなどを指摘した。これにより、日本の気象を研究する場合、少くも北半球の視野で眺める必要があることを明かにし、天気図解析に新しい面を開いた功績は大きいと認められる。

また両君は異常気温に関する多くの解析的研究を行い、これら一連の研究により長期予報の発達にも大きな貢献をした。よって本学会は両君に日本気象学会賞を贈る次第である。

論文

K. Suda and T. Asakura : (1955) A study on the unusual "Baiu" season in 1954 by means of Northern hemisphere upper air mean charts. J. M. S. J. 33.

K. Suda: (1956) A persistent cold outbreak in the Far East related to the blocking situation, J. M. S. J. 34. 137~146.

K. Suda : (1955) On the cold wave of January 1954 in the Far East, Geofisica pura e Applicata, 32, 159-169

T. Asakura : (1956) On the relationship of the anomaly of 5-day mean 700-mb height to the anomaly of 5-day mean surface temperature, Pap. Met. Geophys. 6, 221-227

朝倉 正 : (1954) 25日週期と太陽活動, 研究時報 6, 165-171

ロケットの飛揚試験について (口絵説明)

Rocket を Balloon で空気抵抗の少ない上空まで吊り上げ (大凡 25km 位まで), ここから発射すれば割合経費が少なくて 100km 位まで達することが期待されるが, この方法を Rockoon 飛揚と云っている。

さてロケット飛揚をなぜ船上で行うかは次のような理由からである。すなわちロケットの重量 (10kg以上) に匹敵する浮力を必要とするため, 大型気球となり, ガスの野外充填から飛揚するまで風の影響を受けることが非常に大きい。したがって船を使用して, 船首を風下に向けて船速と風速とを同じになるように加減すれば, 風速の影響を零にすることができ, 作業は非常にスムーズに行うことができる。

アメリカではかねてからこの方法を使っており, 東京大学生産研の糸川教授が帰朝後この方法を提唱し, わが国でも実験を行うことになった訳である。

第1次の飛揚試験は昨年9月17日, 18日凌風丸を使用して房総沖 (野島岬南西方7哩の地点) で行われ, ポリエチレン気球 (直径12米内外, 自重15.5kg) とゴム気球 (800gr) 7個を使ったが, 両方法とも揚げ方の試験は無事成功した。なお実験参加者は責任者気研石井電磁部長をはじめ, 東大糸川教授, 立教大中川教授, 本庁寺田

海洋気象部長等約20名であった。

第2次の実験は本年4月27日凌風丸船上でゴム気球を使って実施されたが, 今回の主な目的はロケットの発射試験であった。参加者は前回と殆んど同じであるが責任者立教大中川教授をはじめ, 気象庁からは気研石井電磁部長, 海洋気象部関係者等約25名であった。

第1回試験は10時38分放球して73分後には高度22,068メートルに達し, その後自然落下して遂に発射しなかったらしい。イグナイターのスイッチは気圧と時計の2方法を併用して万全を期したが, 回線系統の故障があったらしい。

第2回は13時49分放球し, 放球後61分35秒, 高度18,960メートルでロケットの下に直結したゾンデの発信は急激にストップして発射が確認され所期の目的を達することが出来た。

なおこの日は中層雲と下層雲が全天を蔽い, 目視を妨げたが, 今回は発射を確認するためゾンデ以外にロケットテレメーターをつけていた。これはロケットの中に414MCの発振器を入れ, 発射時の加速度で変調周波数を変化させるようにしたものであるが, 402MCのゾンデに邪魔されて感度が悪く, これからは確認することは出来なかった。

淵 秀隆